

## 作家・石原慎太郎とラグビー：「結晶化した父」の残像

### Shintaro Ishihara and Rugby Football : Afterimage of His “Crystalized Father”

大西 好宣 (千葉大学)

Yoshinobu Onishi, Chiba University

#### Abstract

Shintaro Ishihara is widely known as an award-winning novelist and conservative statesman who served as a minister and the Governor of Tokyo. Assessments or evaluations on his achievement as a politician vary, but this study focuses only on his career as a novelist so as to clarify his miraculous contribution to Japan's rugby football through his literature works, namely “Seinen no Ki” (1959) and “Seishun towa Nanda” (1965). This study's hypothesis is that these two novels, including the movies and TV dramas based on them, conveyed the charms of rugby football to the Japanese people for the first time in the style of storytelling. It is also argued that these novels were not only ground-breaking for the 1960s but have an even more profound effect on Japanese society today, in the sense that they have contributed to the promotion of sports in this country. This study further examines why Ishihara focused on rugby in his two works, although he himself played soccer when he was a student.

#### 1 はじめに：背景及び目的と方法論

##### (1) 背景

2019 年秋、日本におけるラグビーW 杯開催直前に、TBS 系列で放映された連続テレビドラマ『ノーサイド・ゲーム』は、それまでラグビーを知らなかった多くの視聴者をテレビの前に釘付けにした。このドラマの原作は、ラグビー強豪校の一つ、慶應義塾大学出身の作家・池井戸潤によるもので、彼自身にラグビーのプレー経験はないものの、彼の作品とそれを元にしたテレビドラマは、ラグビーという競技の魅力をよりわかりやすい形で、お茶の間に向けて発信することに成功した。結果として、この小説及びドラマがW 杯自体の成功にも一定の影響を与えたであろうことは想像に難くない。

彼は元々、同じようにドラマ化された半沢直樹シリーズや『鉄の骨』(2009)、『下町ロケ

ット』(2010)、『七つの会議』(2012)などに代表されるように、企業小説を得意とする作家である。他方、野球を描いた『ルーズヴェルト・ゲーム』(2012)、陸上競技を描いた『陸王』(2016)、駅伝を描いた『俺たちの箱根駅伝』(2024)など、スポーツを題材にした小説を数多く発表していることでも知られる。

今でこそ、池井戸のような作家は珍しくないものの、今から約65 年も前、こうした分野の先鞭をつけた作家がいた。石原慎太郎

(1932~2022)である。当時、純文学路線を歩んでいた彼は、1959 年、より広範な層をターゲットに小説『青年の樹』を著し、ラグビーというスポーツを、おそらく初めて小説という形で広く紹介した。さらに1965 年、石原は同じくラグビーが登場する学園小説『青春とはなんだ』を著す。両作品共に映像化され、ラグビーという競技も広く人口に膾炙し

た。特に後発の『青春とはなんだ』は、日本テレビ系列で同名のドラマがいわゆるゴールデンタイムに全国放送され大人気となった。このように石原は、当時の日本にラグビーを二度にわたって広めたという点で、いわばラグビー界の救世主或いは恩人とも言って良い人物なのである。

## (2) 目的と方法論

本稿では、ラグビー界における作家・石原慎太郎のそうした知られざる、或いは忘れ去られようとしている幾つかの大きな功績を、当該作家に関する、或いは作家自身による幾多の評論やインタビュー、対談、エッセイ、小説、自伝・評伝など、様々な文献を通して明らかにしていく。より具体的には次の三点である。すなわち、

- ① ラグビーが登場する当該二作品（『青年の樹』及び『青春とはなんだ』）が後世に与えた影響
- ② 石原がスポーツを小説の題材にした理由
- ③ 中でもラグビーを複数回取り上げた理由

本稿を執筆するにあたり、一般的な学術論文としての体裁はとるものの、筆者はそもそも文学の専門家ではない。基本的には一人のラグビー愛好家による、一種のナラティブ<sup>1</sup>だとしてご理解頂ければ幸いである。

## 2 文献検討

### (1) スポーツを扱った小説群

わが国で初めて、スポーツを扱った小説としてつとに名高いのは、田中英光が1940年に発表した『オリンポスの果実』という中編である。著者である田中自身が1932年のロサンゼルス五輪ボート競技に出場した経験を元に、同じ日本人の女子陸上競技選手に仄かな

恋心を抱くという内容で、青春小説としての一面も併せ持つ。

これ以降、国内で最大の人気を誇る野球を中心に、多くのスポーツ小説が発表されている。冒頭で紹介した池井戸潤による『ルーズヴェルト・ゲーム』や『陸王』などももちろんその系譜に連なる。

中にはラグビーを扱った小説も幾つかあり、石原以外では芥川賞作家・三田誠広による『やがて笛が鳴り、僕らの青春は終わる』

(1980)がある。この作品では、当時ブームを巻き起こしていた大学ラグビーが題材となっている。小説ではないものの、馬場信宏によるノンフィクション『落ちこぼれ軍団の奇跡』(1981)は、忘れてはならない作品である。後に『スクール・ウォーズ』として映像化(テレビ、映画)され、特にTBS系列で全国放送されたテレビドラマ(1984~1985)は、当時の若者に大きな影響を与えた。但し、これ以降はラグビーという競技の人気低迷と共に、それを扱った小説の数も減り、いわば空白の状態が長く続く。

そんな中、今世紀に入り登場したのは、堂場瞬一による『二度目のノーサイド』

(2003)、『10-Ten-俺たちのキックオフ』

(2009)、『クラッシャー』(2012)といった一連の作品群や、安藤祐介による『不惑のスクラム』(2018)である。上岡伸雄による『この風にトライ』(2007)は、小学生によるラグビーを扱っているという点が珍しい。

他方、世界で最も有名なラグビー小説と言えば、トマス・ヒューズ(1857)による『トム・ブラウンの学校生活』が真っ先に思い浮かぶ。日本でも岩波書店から文庫本が刊行されているこの小説は、ラグビー発祥の地である英国のラグビー校そのものが舞台であり、サイレント時代を含め度々映像化もされている。近代オリンピックの父・クーベルタン男

<sup>1</sup> ストーリー性のある言説の意

爵にも大きな影響を与えたと言われ（西村・星野・高木、2016）、続編として同じ著者による『Tom Brown at Oxford』（1861）<sup>2</sup>もある。

## （２） スポーツを扱ったテレビドラマの影響力

本稿では、石原の小説を映像化した二次作品、特にテレビドラマの影響力についても考察する。よってここでは、一般的なテレビドラマ、或いはスポーツを扱ったテレビドラマについての研究を見てみたい。そうしたドラマは果たして、どの程度の社会的な影響力を持つのだろうか。

大西（2021）は、自らの授業「ラグビーを知る」の中で、日本におけるラグビーの振興策として、どのような方法が有効かを学生に尋ねたところ、2019年の調査では21.5%の学生が、2020年の調査では12.3%の学生が、ドラマやアニメの放映、関連グッズの販売を挙げた。このように、ドラマやアニメによる波及効果を予想する大学生は確かに一定数いるものの、全項目中の順位はそれぞれ6位及び5位で、それ以上に有効と考えられる施策が他に幾つもある。因みに、2019年、2020年双方の調査における第1位はいずれも「小学生にタグラグビーを教える」である。

小川（2011）は、認知科学の手法を用い、NHKの朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」の特定3エピソードを被験者に見てもらい、どの人物にどのような感情を抱いたかを測定した。その結果、テレビドラマは「人間の道徳性や社会的規範を維持する1つのシステムを提供」することによって、「テレビドラマが社会の安定に寄与しているという互惠的な見方」ができると結論する。

一方、正木（2024）は、2,000人の男女を対象に、直近5年間で夢中になったテレビドラマが有るか否かを尋ね、有ると答えた875名

に対して、どの程度夢中になったかをさらに尋ねた。より具体的には、テレビドラマに対する関与の形態を行動的、感情的、参照的の3種に分類し、ドラマのジャンル別にそれぞれのスコアを算出した。それが次の表1である。

表1 テレビドラマに対する関与の平均値

|         | 行動的<br>関与 | 感情的<br>関与 | 参照的<br>関与 | ジャンルごとの<br>各関与平均値 |
|---------|-----------|-----------|-----------|-------------------|
| ラブストーリー | 2.89      | 2.27      | 2.57      | 2.58              |
| ミステリー   | 3.01      | 1.96      | 2.33      | 2.43              |
| 医療      | 2.81      | 2.27      | 2.31      | 2.46              |
| 学園・青春   | 2.68      | 2.11      | 2.10      | 2.30              |
| 朝ドラ     | 2.95      | 2.43      | 2.65      | 2.68              |
| 刑事      | 2.65      | 2.21      | 2.41      | 2.42              |
| 職業      | 2.84      | 2.35      | 2.55      | 2.58              |
| 社会・人間   | 2.75      | 2.13      | 2.65      | 2.51              |
| 大河・時代劇  | 2.97      | 2.15      | 2.39      | 2.50              |
| 海外      | 2.65      | 2.08      | 2.31      | 2.35              |
| 家族      | 2.95      | 2.42      | 2.30      | 2.56              |
| グルメ・その他 | 2.88      | 2.06      | 2.77      | 2.57              |
| 各関与の平均値 | 2.84      | 2.20      | 2.45      | 2.49              |

表にある関与の度合いは、いわばそのジャンルのドラマへの熱中度を表すと解釈出来る。残念ながら、対象となるジャンルの中にスポーツドラマは含まれていないが、近いものに「学園・青春」ものがある。表1を見ると、驚いたことにこのジャンルが最も関与の度合い（2.30）が低く、現代の日本では「学園・青春」ものの社会への影響力は総じて高くないことを伺わせる。

<sup>2</sup> 日本語未訳

### 3 作家・石原慎太郎の功績

#### (1) 作家としての評価

石原慎太郎という人物を知ろうとする際、生まれた年代によって彼の属性に対する理解は間違いなく異なっているだろう。例えば、今世紀生まれの若い人なら、東京都知事を長く務めた政治家として彼を記憶していよう。或いはそれより少し前、昭和の終わりを知る人であれば、同じ政治家と言っても都知事ではなく、石原が国会議員として運輸大臣や環境庁長官を務めた経歴まで知っているかもしれない。

こうした、保守政治家時代の彼に対する印象は、評価する人の立場や考え方によって様々であろう。特にリベラル派側からの石原への痛罵は相当なものである。この点、まさに毀誉褒貶という言葉が相応しいかもしれない。

しかしそれによって、政治家以外の彼の業績に対する評価が些か不当なものになっているという面は否めない。例えば、当の石原自身と同年代の生まれならば、政治家という肩書き以上に作家としての業績が燦然と輝いているに違いない。彼が世に出るきっかけとなった、文学界新人賞及び芥川賞受賞作『太陽の季節』(1955)は映画化もされ、太陽族などという有名な流行語も生んだ。出版した新潮社HPの著者プロフィール欄には、「同作の芥川賞受賞は、その倫理性をめぐって社会的事件となった」とあり、一種の社会現象だったことを示唆する。こうした点からすると、石原と同年代の日本人で小説家としての彼を知らない人はまずいないだろう。

作家・石原慎太郎に対する評価という点では、彼と親交の深かった作家・三島由紀夫との対談が参考になる(石原、1956)。この対談の中で、三島は自らを文壇の万年旗手と称する一方、その役割をようやく渡せる人が現れたと石原に弾んで告げる。そうして、「石原さ

んの出現を嬉しくおもっている」と高く評価する傍ら、作家・石原の本質をエトランジェ<sup>3</sup>と評する。三島は続けて、「僕も以前は多少エトランジェであったわけだ」と述べ、二人の類似性を指摘することも忘れない。

三島の他にも、批評家・小林秀雄、江藤淳、劇団四季の創設者である演出家・浅利慶太など、石原慎太郎と当時交流のあった文壇の偉人たちは枚挙に遑がない。1995年から2012年までは芥川賞選考委員を務めてもいる。こうしてみると、およそ文壇における石原に対する作家としての評価は、一般に知られている以上に高いものと考えて良いだろう。少なくとも、政治家として様々な評価を受けた晩年の石原に対する見方、さらにその定まらなさとは明らかに異なる。

#### (2) 前史としての『青年の樹』(1959)

余り知られていないが、第1章で述べたように石原が小説の題材としてラグビーを用いたのは、後に大人気となる『青春とはなんだ』が初めてではなく、それより6年前に書いた『青年の樹』こそがそれにあたる。長編小説としては、デビュー作『太陽の季節』から数えて6作目である。石原以外の作家を含め、小説というメディアにラグビーを登場させたのは本作が初めてかもしれない。その意味では歴史に残る記念碑的な作品である。

主人公は東京大学に入学したばかりの青年、坂本武馬。様々な経緯でラグビー部に入部する。彼が初めて試合に出場するシーンを原作から拾ってみよう。

後半の終了間近く、じりじり腕をこまぬいていた武馬にスクラムからかき出されたボールが渡った。ブラインドにまっしぐらに突っ込みながら段々厚くなってくる敵のバックスに、リターンパスすると見せかけてちょっと

<sup>3</sup> 異邦人、よそ者の意

したフェイントのモーションで敵を二人抜いて武馬は独走した。ゴールラインが一瞬一瞬近づいてくる。ボールをかかえた腕に動悸が打つのが感じられる。タッチに添って武馬は懸命に駆けた。(中略) 次の瞬間、ゴールライン殆ど数メートル前で、懸命に戻った敵のバックスが捨て身のダイビングタックルで武馬の足を払った。投げ飛ばされたように武馬はボールをかかえたままグラウンドの上にすっ飛んだ。すっ飛ばされながら瞬間、武馬はかっとし、次の瞬間、唖然とし、そしてもの凄く愉快だった。(同書 235-236 頁)

タックルされてグラウンドに倒されることを「愉快」と表現するなど、ラグビーというスポーツの、理屈でない面白さを生き生きとしたタッチで描いている。

写真1 映画『青年の樹』(1960) ポスター



©日活

出版翌年の1960年には、写真1のように石

原の弟である裕次郎の主演により映画化された。そのことについて、石原自身は後に次のように語っている。

以降の弟の映画俳優としてのキャリアはいわば日本の映画史の一部であって、もう兄弟として私の関与するところでありはしない。しかし彼が主演した日活映画のほとんどは駄作で、試写を眺める度私は不満だったが、私自身それに協力したところもあってあまり大きなことはいえない。

(出典 石原 (1996) 164 頁)

裕次郎主演の映画『青年の樹』が、兄・慎太郎の駄作という評価に連なる一本かどうかは定かでないものの、テレビドラマデータベースによれば本作はまた、テレビドラマとしても映像化され、勝呂誉主演により、1961年から1962年にかけTBS系列で放映された。

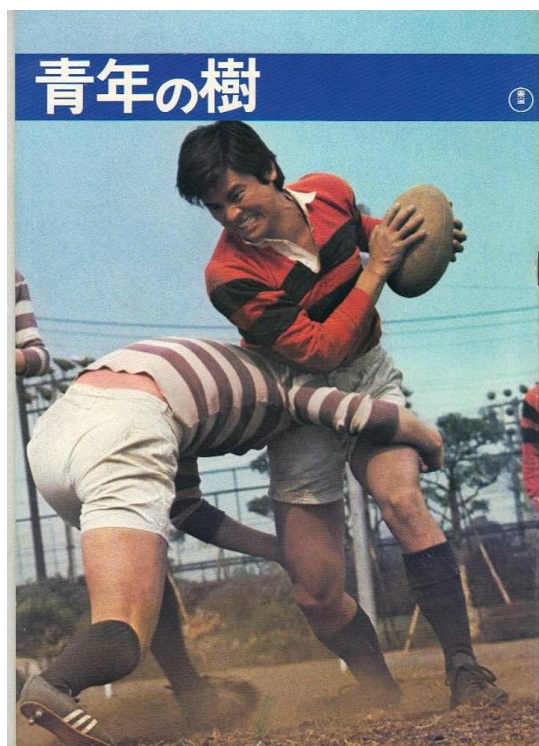
さらに1977年、三浦友和の主演により本作は東宝で再度映画化されている(写真2)。筆者が石原による原作の存在を知ったのも実はこの作品がきっかけで、その意味では時代を超えて複数回映像化されていることの影響力、遡及力は年代の異なるファン層をさらに拡大するという意味で大きい。

因みに、1960年の日活版では主人公の設定や大学名が改変されており、1977年の東宝版の方が原作により忠実である。そして、それにはおそらく理由がある。実は、後者を監督した西村潔は石原の一橋大学時代の同期で友人なのである。筆者は学生時代(1980年代前半)、西村監督自身の口から、石原と二人で東宝の入社試験を受けた際の思い出話など、彼らの交流の深さを伺わせる逸話を幾つか聞いている。

いずれにしろ、『青年の樹』という小説は二度にわたって映画化され、一度は実弟が主演し、一度は友人が監督を務めた。それもこれ

も、作家である石原自身の幅広い交友、或いは奇跡的な天の配剤が為せる技と言えよう。

写真2 映画『青年の樹』(1977) 資料



(映画パンフレットより)

### (3) 小説『青春とはなんだ』(1965)

2019年のラグビーW杯日本開催の翌年、笹川スポーツ財団が石原慎太郎にインタビューした次のような記事がある(笹川スポーツ財団、2020)。

(聞き手) 昨年はアジアで初のラグビーワールドカップが開催されました。私にとってラグビーと言えば、やはり石原慎太郎さんの著書『青春とはなんだ』(1965年・講談社発行)をなくして語ることはできないほど、大きな影響を受けました。私の世代のほとんどが、そうだったと思います。(石原)『青春とはなんだ』を読んでいただきましたか。それは、どうもありがとう。ラグビーを題材にしたというのは、たまたまなんですよ

(笑)。私自身は、高校、大学とずっとサッカーの選手でしたからね。

しかし、『青春とはなんだ』の前史として『青年の樹』があることを知っていれば、石原がラグビーを小説の題材にしたのは決して「たまたま」でないことは推測がつくだろう。なぜラグビーだったのかについては後で触れることとして、本項では小説『青春とはなんだ』の影響力について考えてみたい。

まずは小説『青年の樹』を振り返ろう。同書におけるラグビーの取り扱い、あくまで脇役に過ぎない。小説の中でラグビーが登場するのも中盤以降である。これに対して、『青春とはなんだ』は、地方の高校に赴任したアメリカ帰りの新任教師・野々村健介が、同校のラグビー部員との触れ合いの中で互いに成長していく姿を描いており、ラグビーは脇役というより、舞台設定の重要な一部となっている。小説のクライマックスシーンも、次のようなラグビーの描写で締め括られている。

「頑張れ、後二分、後二分だぞ」

健介はタッチに添って走り出しながら叫んでいた。しかし、断然優勢の相手に如何とも抗し難く、ルーズスクラムはじりじりとタッチとゴールラインの出会い点のコーナーに向かって押されていった。そして遂に北日のラグーは味方のゴールラインを突破したのだ。ホイッスルが鳴った。鳴りはしても、もみ合うルーズはそのまま容易に解けはしなかった。(中略) 相手がコンバートキックに構えた時、健介は生まれて初めて他人が見ている前で、手を合わせて祈った。

(出典 同書360頁)

驚くなかれ、こうした生き生きとしたラグビーの試合描写が、350頁の試合開始から363頁の試合終了まで延々と続く。この辺りはまさにスポーツ小説の醍醐味である。

そうかと思うと、小説の中程では主人公・野々村をして、次のようなエピソードを語らせてもいる。

ラグビーの歴史にはいろいろなエピソードがあるな。なんかイギリスの名選手が、大事な決勝戦でトライをやった。しかし審判はその一瞬前に彼がタックルされてダウンしていてトライを無効として認めなかった。(中略) その男が戦争にいて、(中略) いよいよ死ぬ間際にかけつけた牧師に何か言い残すことはないか、と言われた時にだな、十数年前の、あの時の試合の僕のトライは間違いなくトライだった、とひとこと言って死んだそうだ。

(出典 同書 137 頁)

ここではイギリスの名選手となっているが、一般的にはそのイギリスと戦ったニュージーランドの選手と解されている。しかし実は、このエピソード自体の真偽は不明である。それにも関わらず、わが国のラグビー指導者や経験者の間では比較的良く知られた逸話でもある。そしてそれには、石原による先の描写が深く関わっているかもしれないというのが筆者の推測である。

というのも、西村・星野・高木 (2016) によれば、一般に「幻のトライ」と言われるこのエピソードについて、大学生以下の場合には知らない者が7~8割なのに対し、50歳以上の指導者は7割近くが「聞いたことがある」と答えているからである。つまり、『青春とはなんだ』という小説に直接的、また間接的に触れた確率の高い世代には、当該エピソードを知る者が多いというのである。

#### (4)『青春とはなんだ』の映像化の影響

こうした原作の魅力は無論だが、見るスポーツとしてのラグビーの魅力を効率的に広め、より多くの人々にこの作品を届けたとい

う意味では、本作の映像化の影響も大きいだろう。その一つが、1965年10月から翌年11月まで、日本テレビ系列で放映された同名のテレビドラマである。当時のプロデューサー・岡田晋吉は次のように述懐する。

昭和39年の12月、年も押し迫ったころ、東宝のプロデューサーが、石原慎太郎が著したこの原作を持って来た。私もそれを一晩で一気に読んでしまい、「これはいけるぞ!」という感触を得た。(中略) この作品を企画した時、テレビ映画を日本に定着させるためには、この作品を成功させるかどうか勝負だと思った。だから、何が何でも超一流のスタッフを集めて悔いの無い形で制作したいと考えた。

(出典 岡田 (2003) 38 頁、40 頁)

いかに熱くなったとはいえ、あの大著を果たして一晩で読了出来たかは些か眉唾物だが、当時の岡田の興奮や張り切りぶりが確実に伝わって来る。実際、岡田はそうしたエネルギーを昇華しようと、このドラマで数々の新たな挑戦を試みている。

例えば、先の述懐で岡田は「テレビ映画」という語を用いているが、これは当時のテレビドラマ制作で一般的だったスタジオドラマという手法との対比であり、両者の大きな違いは映画並みのロケが多用出来るか否かである。もちろん、ラグビーを視覚的に最大限表現するためにはロケが欠かせないことは言うまでもなく、岡田はテレビ映画としての手法にあくまで固執した。

他方音響の面でも、当時これも一般的だったアフレコを排し、初めて同時録音という手法を取ったのも、このドラマが体現した新機軸であった(前掲書 47 頁)。

因みに、岡田が集めた超一流のスタッフとは、「当時の東宝のドル箱監督の千葉泰樹」

や、「東宝の文芸路線の第一人者」井出俊郎及び若大将シリーズで有名な田波靖男ら第一線の脚本家、主題歌作詞には岩谷時子、歌唱した布施明らがいる（前掲書 40 頁、43 頁）。



（脚本家・井出が当時専ら仕事場にしていた東京・六本木の国際文化会館、2024 年筆者撮影）

さらに主演には、「当時の東宝映画の男優スターとして、加山雄三と人気を二分していた夏木陽介」を配し、音楽にはいずみたくを起用した（前掲書 45 頁、48 頁）。こうした、いわば昭和を彩るスターたちがこのドラマを支えたのである。

このドラマが放映された日曜日の夜 8 時には、NHK の大河ドラマが裏番組として控えており、当時、民放のドラマでは太刀打ち出来ないと考えられていた。「それが番組を開始して 4 ヶ月、視聴率で、じわじわとその差を縮め、遂に逆転してしまった」のである（前掲書 51 頁）。この時の嬉しさは忘れられないと岡田は言う。

なお、ドラマ『青春とはなんだ』第一話の「汽車から降りた男」は、放送法に基づくわが国唯一の放送番組専門アーカイブ施設である放送ライブラリーにも収蔵されており、そのことから本作品の価値や評価の高さが伺えよう。

このテレビドラマの放映が開始される三か月前、石原の弟・裕次郎主演で公開された同

名の映画もあるものの、社会への影響力という意味ではテレビドラマの方が余程大きかったと思われる。なぜなら、この頃を境に国内では映画からテレビへという大きなシフトが起きたからである。そのきっかけは 1964（昭和 39）年 10 月に東京で開催されたオリンピックであり、その意味で先の岡田の述懐冒頭部分で、彼が原作を手にしたという「昭和 39 年 12 月」というタイミングは非常に示唆的に思える。

日本国際映画著作権協会（2012）による調査によれば、1950 年代後半から 60 年代前半にかけて、年間 10 億人を超えた映画の観客数は、1958 年をピークに急降下しており、1970 年頃にはその 4 分の 1 まで減少している。東京オリンピックの開催前、『青年の樹』のテレビドラマが放映されていた 1961 年頃はまだ小さかったテレビというメディアの影響力は、『青春とはなんだ』がテレビ放映された 1965 年には、オリンピックの前後、わずか 4 年の違いとはいえ格段に大きくなっていった。

こうした世の中の底流の大きな変化に加え、『青春とはなんだ』という個別のテレビドラマが社会的に大きな影響を持ったと考えられる理由が三つある。一つは、放映期間の長期化である。制作当初は当時一般的な半年の放送という計画であったものが、NHK の大河ドラマを視聴率で上回ったという前述の流れを受けて、ドラマの放映期間が当初の倍の 1 年に変更され、より多くの人の目に触れたのである。

二つ目は、当時の番組スポンサーとして、このドラマの放映を一社提供していた大正製薬株式会社が、21 世紀の今に至るまで日本ラグビーを継続的に支持・支援しているという事実である。少しでもラグビーを知る者であれば、現在のラグビー日本代表チームの公式ジャージに同社の製品名がプリントされていることを知っていよう。大正製薬とラグビーとの縁は深く、そのそもそのきっかけを作

ったのはこのドラマであり、さらには作家・石原慎太郎であったことはここで記憶されるべきであろう。

三つ目は、このドラマが単発で終わらず、後に連綿と続く、いわゆる青春シリーズとして定番化されたことである。

「青春～」シリーズとは、1965年10月24日スタートの『青春とはなんだ』に始まり、『これが青春だ』(1966年～)、『でっかい青春』(1967年～)、『進め!青春』(1968年～)、『飛び出せ!青春』(1972年～)、『われら青春!』(1974年～)、『青春!真中!』(1978年～)、『ゆうひが丘の総理大臣』(1978年～)、『あさひが丘の大統領』(1979年～)あたりまでの作品を指す。

(出典 ハウス・オブ・ドレッド (1997) 82頁)

シリーズ2作目となる『これが青春だ』は既に石原の手を離れた、オリジナルのストーリーである。より正確に言えば、前作『青春とはなんだ』で当初予定になかった半年以降の後半エピソードは全てテレビ局によるオリジナルなので、その時点で既に石原の手は離れていたとも言える。

とはいえ、作家によっては、明らかに自分の作品を、その世界観も含めて土台にした別の作品を他者が新たに創作し、ビジネスとして展開することについて、必ずしも快く思わない者もいるだろう。しかし、石原はこれを了承した。以下は当時、逗子の石原邸を訪ねたプロデューサー・岡田の証言である。

「今度の作品はオリジナルでいきたいのですが・・・」と恐る恐る尋ねた。すると、案

ずるより産むが易しで、簡単にOKしてくれた。「面白い番組を作ってよ」と励ましてくれた。

(出典 前掲書 53頁)

岡田はそうした石原の寛容な態度を受けて、「この時、氏<sup>4</sup>が抱いていた『夢』とか『心の余裕』といったものを盛り込みたいと思った」と述懐する。実際、以降に放映された青春シリーズは、どの作品もそうしたテイストを基調にしているように筆者には感じられる。

ともあれ、石原の原作がきっかけとなって出現したこれらのテレビドラマ群は、本放送が終了した後も繰り返し再放送され、全国に多くのファンを生んだ。かくいう筆者も間違いなくその一人であり、ラグビーに対する親近感を初めて抱いたのは『われら青春!』がきっかけであった。

上記のうち、『青春とはなんだ』『でっかい青春』『われら青春!』ではラグビー部が、『これが青春だ』『進め!青春』『飛び出せ!青春』ではサッカー部がドラマの舞台となっており、ラグビーとサッカーがほぼ交互に登場するものの、逆にそれ以外のスポーツが登場しないのが興味深い<sup>5</sup>。ラグビーとサッカーは男のスポーツだとか、動きが激しくテレビ映えするなど、その理由は様々あるだろうが、舞台となる高校の応援歌としてシリーズで度々用いられている曲「貴様と俺」の歌詞が最も影響しているのではないか、というのが筆者の考えである。ラグビーとサッカーこそ、歌詞にある「泥んこ苦行」のイメージに最も符合する、という意味である。

「貴様と俺」(作詞:岩谷時子、作曲:いず

<sup>4</sup> 石原のこと

<sup>5</sup> 同時時間帯に同じ系列局から放送された『おれは

男だ!』(1971~1972)で剣道が扱われていた例もあるものの、いわゆる青春シリーズではないのでここでは除外

みたく) 歌詞

空に燃えてる でっかい太陽  
腕にかかえた 貴様と俺だ  
バネもきいてら 血もわくさ  
エイコラ GO! GO! やっつけろ  
年がら年中 傷だらけ  
泥んこ苦行は なんのため  
勝って帰らにゃ男じゃない  
(出典 Uta-Net より一番のみ抜粋)

実はそんな「泥んこ苦行」を地で行くエピソードがある。『われら青春!』で主演を務めた、当時まだ新人俳優だった中村雅俊に関する、番組プロデューサー・岡田の証言である。

学生時代バスケットをやっていたスポーツマンの中村だったが、ラグビー・シーンの撮影初日の日、ゲロを吐いた。画面で見ていると、たいして走って無いように見えるが、実際の現場では何回もテストをするので、相当の距離を走らされている。テストに3回、NGでも出ればまた一回と、10メートル走る映像のために、100メートルくらいは走らなければならないのだ。

(出典 岡田による前掲書 116-117 頁)

こうした過酷とも思える撮影は、おそらく『青春とはなんだ』をはじめとする他のシリーズ作品でも同様だっただろう。だからこそ、迫力のあるシーンがお茶の間に届けられたのだと言えるかもしれない。

ドラマの中にスポーツを持ち込んだ、こうしたシリーズの成功は、後にいわゆるスポーツ根性もの、略してスポ根という分野を新たに派生させる。ドラマの中のスポーツの比重をさらに高め、むしろそれを中心にドラマを組み立て展開していく手法である。ただ、本稿の趣旨からは逸れるので、詳しくはまた別

の機会に譲りたい。

#### 4 作家・石原慎太郎とスポーツ、そしてラグビー

ここまでは、第二章で触れた目的「①ラグビーが登場する当該二作品が後世に与えた影響」について述べてきた。本章では残る二つの目的、すなわち、②石原がスポーツを小説の題材にした理由、そして、③とりわけ、ラグビーを複数回取り上げた理由、について考察してみたい。



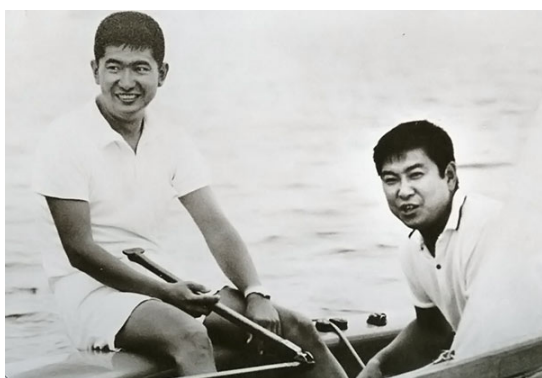
(出典 笹川スポーツ財団 (2020))

##### (1) 作家・石原慎太郎とスポーツ

石原のスポーツに対する考え方を知る上で、まず彼自身がスポーツマンであることを知っておくべきだろう。例えば石原は、その晩年の作品である『弟』(1996)や『父のしおり憧憬』(2023)など、多くの自伝的作品で、自身が中学、高校、大学とサッカーをプレーしたことを紹介している。

さらに、それ以上にのめり込んだのがヨット競技である。上記の『弟』には、父・潔にせ

がんで買って貰ったヨットを、兄弟で乗りこなせるようになるまでの日々が青春の輝きと共に鮮やかに綴られている。よく知られるように、海や風という大自然を相手にするヨットは、常に死と隣り合わせの危険なスポーツである。石原には他にも「死のヨット・レース脱出記」(1963)という優れたルポルタージュ作品がある。



(出典 笹川スポーツ財団 (2020))

他方、スポーツと絡めて、弟・裕次郎について述べた次のような一文がある。石原の中でスポーツが肯定的に捉えられていることがわかる。

弟の裕次郎があれほど絶妙な反射神経を持ち、頑健な肉体を持ちながら、結果として早死したのは、忙しさもあったかもしれないが、折りに触れて手近なスポーツをこなし、全身の汗を流すという習慣を続けることができなかったせいだと、かつて裕次郎に比べて病弱だった自分の過去を思い比べながら、確信している。

(出典 『父のしおり 憧憬』 290-291 頁)

また、前章で紹介した作家・三島由紀夫との対談の中で、三島の挑発に対して石原による次のような興味深い発言がある。

三島：スポーツをあなたがほんとうに重んず

るなら、ほんとうに立派な芸術家でなければ意味ないね。

(中略)

石原：僕のは睡眠でなく、スポーツです。ごく生理的要求ですね。一週間なにか運動しないと、頭がもやもやして、ちっとも文章は浮かんでこないんです。

(出典 「新人の季節」『三島由紀夫全集』 39 巻 267-268 頁)

## (2) 作家・石原慎太郎とラグビー

これまで見てきた通り、作家・石原がスポーツをごく自然な存在として内的・肯定的に捉えていることは明らかであろう。では、中学、高校、大学とサッカー選手であった石原が、小説の題材に何故自らがプレーした経験のある競技ではなく、敢えてラグビーを選んだのだろうか。その点が筆者には長い間謎だった。

一説によれば、石原と中学・高校で同級生だった経営者・飯田亮の影響ではないかとのまことしやかな噂がある。飯田は国内における警備会社の草分けである日本警備保障株式会社(現セコム)の創始者として知られるが、中学・高校ではラグビー部だったというのである。飯田には同じく、石原が『太陽の季節』で描いた若者たち、いわゆる太陽族のモデルではないかとの別の噂もあるものの、長田(2012)によれば、飯田自身が石原とは学生時代それほど親しい間柄でなかったことを告白していることから、これらの噂は総じて余り信憑性が高いとは言えない。

ではなぜラグビーだったのか。それを解くヒントをくれたのは、石原の死後に出版された著書『「私」という男の生涯』(2022)という作品である。同書は石原自身と妻、両者の死後に出版することを条件に書かれた特異な自叙伝である。その中に、石原の父・潔について触れた「ゴルフやボート、それにラグビーと万能のスポーツマンだった」という表現があ

る（「私という男の生涯」文庫版 35 頁）。なるほど、父親がラグビー経験者だったのである。

父・潔は石原がまだ学生の頃に、52 歳という若さで亡くなっている。石原が実父を敬愛していたことは関係者の間では非常に有名な話で（後述）、2023 年、同じく石原の死後に出版された『父のしおり 憧憬』という著書のタイトル自体が何よりも雄弁にその事実を物語っている。石原の父・潔は愛媛県宇和島の出身で、旧制中学を卒業後、同志社大学への進学が決まっていたが、同郷の実業家である山下汽船の創始者・山下亀三郎に請われ同社に入社したとのことである（同書 33 頁）。

石原はこの本の中で、心理学者のパーソンズによる、「父親は家族の中に社会を持ち込み、家族を社会の中に持ち込む。父親は、訓練と統制を子どもに与え、子どもを母親依存から引き離し、子どもを社会の中へと押し出す」（312 頁）という説を引きながら、彼自身、父親の役割について次のように語っている。

僕はもともと、父親に比べて子どもたちと時間的に家庭に長くいる母親のうけもちだが、しかし、折りに触れ機微に付して、父親がすべき僕があるはずだし、また、父親の僕を教える方が口うるさい母親よりも強烈な印象で子どもに残ることがある。

（出典 『父のしおり 憧憬』 312 頁）

石原自身がまさにそうした父の強い影響を受けていたことを暗に示唆する内容である。父・潔については、石原の実弟である俳優の石原裕次郎も次のような一文を寄せており、兄弟共に父への強烈な思慕が息づいていたことを伺わせる。

父はほんとうに子ボンノウな人だった。兄や私を、それこそ目に入れても痛くなかったよ

うだ。小さいころ、どんなに父にしかられても、その晩父と一緒にフロに入るのが楽しみだった。兄と三人ではいる。そして父が一人ずつ子どもを洗うのである。

（出典 石原裕次郎（1973） 66 頁）

文芸評論家の福田和也も、かつて石原自身と対談した経験から、「石原さんにとって、父親は大きな存在であった」とし、それを「結晶化した父」と表現する。「自分が成人する前に亡くなった父親の姿は石原さんの中で結晶化され、想起と分断を経て、一つの指標を形成するにいたった」というわけである（福田、2022）。もしかすると、石原は執筆しながら、『青年の樹』の坂本武馬には青年時代の父を、『青春とはなんだ』の野々村健介には大人になってからの父を、それぞれ投影していたのかもしれない。

## 5 今後の課題

ここまで、国内におけるラグビーの理解や普及促進に、作家・石原慎太郎が果たした奇跡的とも思える業績について、既存の文献を積み上げながら整理し、明らかにして来た。また、後半は石原が何故ラグビーを小説の中で取り上げたのかという理由について触れ、それは敬愛する父の影響ではなかったかとの独自の推論を展開した。

けれども、推論の部分はあくまで一つの仮説に過ぎない。現時点で考え得る肯定的な傍証を可能な限り積み重ねたつもりだが、冒頭で述べた通り、筆者はそもそも文学の専門家ではないし、第一、仮説を確かめようにも、当の本人は既に鬼籍に入ってしまった。

但し、今からでも検証することが可能かもしれない分野もある。例えば、テレビドラマとなった『青春とはなんだ』の社会的な影響力については、第 2 章で紹介した小川

（2011）の手法が応用出来るかもしれない。過去に遡ることは出来ないのも、あくまで現

代人の視点では、という制約はあるものの、後進の研究を期待したい。

## 謝辞

本稿は筆者が長らく温めていたアイデアがようやく一つの形になったものであり、その意味で個人的に大変嬉しく思うと共に安堵もしている。どれくらい長い間だったかと改めて考えると、それは高校時代（1970年代後半）に初めて小説『青春とはなんだ』を手に取り、当時のラグビー部の仲間たちと回し読みをした懐かしい思い出に辿り着く。普段は小説など読まないヤンチャな彼らが、この小説だけは奪い合うようにして手に取り、全員が面白いと言ってくれた。そんな若き日の興奮や熱気が、本稿の執筆において筆者を精神的に後押ししてくれたことは間違いない。些か遅きに失した気もするが、当時の気のおけないラグビー仲間たちに心から感謝したい。

## 引用文献（紹介順）

- 池井戸潤（2019）『ノーサイド・ゲーム』ダイヤモンド社  
池井戸潤（2004）『（半沢直樹1）俺たちバブル入行組』文藝春秋  
池井戸潤（2009）『鉄の骨』講談社  
池井戸潤（2010）『下町ロケット』小学館  
池井戸潤（2012）『七つの会議』日本経済新聞  
池井戸潤（2012）『ルーズヴェルト・ゲーム』講談社  
池井戸潤（2016）『陸王』集英社  
池井戸潤（2024）『俺たちの箱根駅伝』文藝春秋  
石原慎太郎（1959）『青年の樹』角川書店  
石原慎太郎（1965）『青春とはなんだ』講談社  
田中英光（1940）『オリンポスの果実』角川書店  
三田誠広（1980）『やがて笛が鳴り、僕らの青春は終わる』角川書店  
馬場信宏（1981）『落ちこぼれ軍団の奇跡』光文社  
堂場瞬一（2003）『二度目のノーサイド』小学館

- 堂場瞬一（2009）『10-Ten-俺たちのキックオフ』PHP 研究所  
堂場瞬一（2012）『クラッシャー』、あさのあつこ（2012）『風色デイズ』所収、ハルキ文庫  
安藤祐介（2003）『不惑のスクラム』角川書店  
上岡伸雄（2007）『この風にトライ』集英社  
トマス・ヒューズ（1857）『トム・ブラウンの学校生活』岩波書店  
Thomas Hughes（1861）*Tom Brown at Oxford*, FQ Books.  
大西好宣（2021）「大学生が考える日本ラグビーの振興策：W 杯日本大会開催前後の比較を通して」『ラグビーフォーラム』14, 41-47., 日本ラグビー学会  
小川有希子（2011）「テレビドラマの享楽をめぐる認知と感情のメカニズム-登場人物に対する共感が生み出すパラドクスな享楽の検証と考察-」『Cognitive Studies』18(1), 79-99., 日本認知科学会  
正木誠子（2024）「テレビドラマに対する『関与』の実態：ジャンルと関与別の検討とオンラインコミュニケーションとの関連」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』97, 43-59., 慶応義塾大学  
石原慎太郎（1955）『太陽の季節』新潮社  
新潮社 HP  
(<https://www.shinchosha.co.jp/book/111901/>)  
石原慎太郎（1956）「新人の季節」『三島由紀夫全集』第39巻（2004）所収、新潮社  
石原慎太郎（1996）『弟』幻冬舎  
テレビドラマデータベース HP  
([http://www.tvdrama-db.com/drama\\_info/p/id-5115](http://www.tvdrama-db.com/drama_info/p/id-5115))  
西村克美・星野繁一・高木應光（2016）「ラグビーの精神・歴史・伝統の理解」についての一考察『ラグビーフォーラム』9, 65-71., 日本ラグビー学会  
笹川スポーツ財団（2020）「スポーツの変革に挑戦してきた人びと 第88回 オリンピック招致活動に込められた1964年の思い 石原慎太

郎」

(<https://www.ssf.or.jp/knowledge/history/interview/088.html?tab=sStory1>)

岡田晋吉 (2003)『青春ドラマ夢伝説 あるプロデューサーのテレビ青春日記』日本テレビ放送  
日本国際映画著作権協会 (2012)『日本の映画産業及びテレビ放送産業の経済効果に関する調査—報告書—』三菱総合研究所  
ハウス・オブ・ドレッド編 (1997)『懐かしの青春ドラマ大図鑑』ジャパンミックス

Uta-Net HP (<https://www.uta-net.com/song/33294/>)

石原慎太郎 (2023)『父のしおり 憧憬』青志社  
石原慎太郎「死のヨット・レース脱出記」

(1963)、玉木正之編 (2015)『彼らの奇蹟』所収、新潮社

長田貴仁 (2012)『セコム その経営の真髄』ダイヤモンド社

石原慎太郎 (2022)『「私」という男の生涯』幻冬舎

石原裕次郎 (1971)「特別寄稿『父のこと』」石原慎太郎 (2023)『父のしおり 憧憬』所収、青志社

※第一章「父のしおり」は、潔の二十三回忌法要 (1971) で近親者に配られた小冊子

福田和也 (2022)「石原慎太郎の父と海」文藝春秋社編『石原慎太郎と日本の青春』所収、文藝春秋